宗像

毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-3505　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311㈹
定価　一年送料共 1000円

神具・装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
福岡店　福岡市博多区東公園二－三一（〒812－0045）
電話　福岡（92）六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600－8231）
電話　京都（361）三四一－三三四一㈹－四番
三四三－三三四一番

五月祭（浜宮・皐月宮）斎行

＝五月晴れに恵まれ＝

浜宮祭

風薫る五月五日、神郡宗像の中央を流れる釣川の河口、玄界灘の潮騒が聞える神湊の「浜宮」と対岸江口の「皐月宮」に於いて恒例の五月祭が斎行された。

この日は「端午の節句」として男の子を祝う日となり、現在は「子供の日」として祝日に定められている。

我が国では、古来より一年を五節句に分け、その季節と生活に深い関係を持ちながら祭を通して祖神崇拝の心と行事を育てて来た。

「一月七日の人日」「三月三日の上巳」「五月五日の端午」「七月七日の七夕」「九月九日の重陽」にそれぞれ節句をつけて呼び、各地方に種々の行事が受けつがれている。

神郡宗像では、この浜宮、皐月宮祭を、「五月会」と呼び往時には盛大な祭典が行われていた様子が古記録からも知ることが出来る。

宗像大社古文書「正平年中行事」の中に五月五日と八月十四日には、第一宮（辺津宮）、第二宮（中津宮）、第三宮（沖津宮）、織幡宮、許斐権現、孔大寺神社の神輿が御幸し盛大な神事が行われた、と記されている。

又筑前国続風土記附録の江口五月浜宮の記録に＝「田島宮屯宮の地にして、松林の石壇あり。いにしへは五月五日大祭ありしが今は里民寄りつどひて、かたばかりなる祭りを執行ふと云」＝と記し、さらに同拾遺十七には、皐月社は「皐月松原に在、古く田島の神の屯宮の地にして、五月五日大祭有。競馬をも執行す。今に小祠を建て、宗像三神を勧請し、毎年形許の祭をなせり」と記録されている。

皐月祭

この様な歴史を持つ祭事であり今も神饌・直会膳にそれが伺える。

両宮とも祭壇には、古式により赤飯・菖蒲酒・粽が供えられる。また、直会の席には方五寸の折敷に楢の葉を置き、その上に握り飯（赤飯）・がめ煮・ナマス等が盛り付けられ栗箸でいただく。

今年の五月五日の空は晴れ渡り夏の様であった。周囲の樹木は新緑に萌え小鳥の囀りと風にゆらぐ若葉が自然の音色を奏でる中、太田宮司の祝詞が奉上され、参列者代表の玉串拝礼が順次行われて両宮の祭典は滞り無く終了した。

祭典終了後、五月寮に於いて直会が行われ、宮司以下奉仕神職、参列者が集い、歓談の一刻を過した。

神郡宗像もこの祭りが終ると田植の季節となる。水田に水がひかれ、耕耘機の音が響き渡り、早苗が初夏の風にゆれる中、カエルの合唱が始り、急ぎ足で夏が訪れる。

江口（辻八幡宮）五月祭

江口五月祭直会

江口区鎮座の辻八幡宮境内社「五月宮」でも同日、さつき祭が斎行された。

明治の頃、釣川が大洪水で氾濫した時皐月宮の祠を八幡山に上げたのが始まりと伝えられている社で、現在でも毎年江口区住民総出の奉仕で祭典が続けられている。この祭典は区民が班割りで当番座元となり、辻八幡宮拝殿で直会が開かれる。直会膳は柿の若葉にヌタアエを盛り、葦茎の箸でいただく簡素な席であるが撤下の菖蒲酒が拝殿いっぱいの人々にふるまわれ楽しい一時を過ごし、何か古しえの直会を思い知る気持ちとなる。又この席には、玄海少年自然の家、玄海ゴルフ場などの代表者も参列され住民と企業が一体となって楽しく語り合う席でもある。

参列者は帰途にキナコ餅の土産をいただくのもこの祭りの楽しみとなっている。「さつき祭」が終ると田畑の作業もいそがしくなり、玄海の海辺も賑わいを見せて来る。

余滴

御先祖のルーツをたずねて現世の人々が輪を広げる話はよくある。当地玄海町でも鐘崎漁民の人達と遠く石川県能登輪島漁民の方々が宗像神社を通して先祖の恩に感謝し毎年正月に参拝される等の親交の輪を深められている。

ここに、徳山市大津島と福岡市能古島の人々が「姉妹島の交流」を続けられている心あたたまる話を紹介しよう。

これは一人の地方学者の調査から始まった、漁業歴史に詳しい「高田茂廣」著の“玄海灘に生きた人々”の十人墓の話である。

高田氏は一通の手紙から瀬戸内海に浮ぶ大津島へ行かれ、地元の人々が「十人墓」と呼び大切にしておられる無縁塚に参られた。その墓石の年号を調査され、寛延元年に能古島の廻船が事故に会い、その時の遭難者の墓である事が明らかになった。

能古島の人々が完全に忘れ去っていた遭難者を、大津島の方々は立派な墓を建て、二百数十年もの間、大切に祀って下さっている事を知った高田氏は能古島の人々と計り交流を始められた。

昭和五十七年には、当時福岡市長であった進藤一馬氏がお礼に訪島され、二百年祭が盛大に行われた、と云う。以後両島で「姉妹島」の交流が始まり今も続いている。この様な話を聞くと心があたたかくなる。毎朝新聞を見るのがこわい様な昨今の社会状勢にあって、日本人の心と情、徳と信について今こそ一人一人が反省すべき時だと思う。

第四四三回　宗像大社歌会詠草

大野展男選

毎月25日〆切（厳守）

吉留　高山　信子

掃除機のとどかぬ棚の埃など拭いてやりぬ娘の家にきて

（評）電気掃除機で事足りたとする若い世代でもあれで案外不便である。昔のように叩きや雑巾で棚などの埃を奇麗に払っている母親の姿が目に浮ぶ。素朴さがいい。

名古屋　小田　留子

黄の帽子被りし子らの一団が近づきてくる菜の花のごと

（評）黄の帽子を被っている子らの一群を「菜の花のごと」と比喩したことにより、賑やかに近づいてくる子供達の元気で可愛い姿を鮮やかに浮びあがらせている。鋭い感性に注目した。

日の里　大和美由紀

まぶた閉じ春の日受けをり瞑想の聖のごときオランウータン

（評）この歌も比喩のたくみさで、人間に一番近いと言われているオランウータンを親しく且つ神秘なものとしてとらえて、印象ぶかい一首となっている。

ひかり ヶ丘　藤原みさを

かすかなる叔父の記憶を語らむと五十回忌今日実家に帰りぬ

名古屋　小田　喜一

車社会と今はなりたり道しるべ傾くままを直す人なし

田　久　井上　光

花影に杖つく老女なかにして写真撮り合ふさまに見惚る

庄内　原田　衛

春雨に庭の桜は散り敷けり病の床より一人眺むる

朝野　藤井　浩子

島原の水清らかに湧き出づる噴火の悲しみ忘れしごとく

鐘崎　安永　久子

老二人言葉捜して語り合う日に一回は笑う事など

福間　中村　勇

恐らくは悲しみをらむ亡き父母は家を囲みてマンション建つを

田野　森　甲子

季くれば通る人ごと見上げをり路上に枝張る山桜の花

原町　八波　五月

朗々と杜甫の漢詩の聞こえ来る日旺の朝の目覚め楽しも

武丸　中村さつき

何処にも桜咲きゐる春の日に稚児行列を友と見てをり

日の里　石松　弘次

よもぎ餅友賜びたるも多くして廻り道して娘の家へ頒つ

自由ヶ丘　細川　絹子

差し入りて日はあたたかし心地よくまどろみゐるに人の訪ひ来る

土穴　瀧口　敦子

トンネルをぬけて広がる実柑山あまねく日を浴び黄に輝きぬ

田野　森　つるの

水張りし早期田の朝鷺一羽影を写して餌漁りゐる

光岡　四之宮多惠子

出迎えのごとくほころぶ桜花春の宴の椅子に座す吾

徳重　石松ヤス子

媼一人守る屋敷の奥庭に染井吉野は花盛りなり

光岡　河村　久光

溝川に架ける橋を車行き吹くそよ風の未だに冷たし

大島　越智　治子

大木にからまりて咲く山藤のうす紫に朝の日光る

池田　小田　イセ

道しるべに昔の人の名刻まれて碑なつかしく郡道に立つ

在自　佐々木和彦

入り日うけ染まりししろつめくさの花幼は一つ一つ摘みゆく

福間　池浦千鶴子

蕾のまま手折られ来たる桃の花実りしらずに花瓶にひらく

光岡　森田富佐子

大粒の苺にミルクと砂糖かけ独歩の詩集を思いて食みぬ

町上津役西　有吉　陽子

日は没りて満月窓にさし入りぬ一人炬燵に子らを待ちをり

曲　天野　玲子

指さして母に教ふる山桜車窓に見ゆる樹の間に淡し

光岡　古森テル子

酷寒の朝を目覚めてコトコトと重ね戸開き熱き茶を飲む

福間　二宮　末子

宗像の大社参りの細道で聞く鶯の初音おさなく

福間　井上かつみ

旅にして見つけし路傍の花の種長き期待に今応えをり

国民の祝日に関する法律を改正して、幾つかの祝日の日付を移動し、土・日・月の三連休を作らうとの動きが出てゐるといふ。

「祝日」を単なる労働休日と捉へ、連休が増えれば国民福祉が充実し経済効果が上がる、との考へから計画されてゐるやうだが、その日が祝日に選ばれた経緯を考へることなく、またそこにこめられた先人の思ひを無視するかのやうに見える動きに危惧を感じざるを得ない。

このやうな動きに対し、各種団体から「祝日移動」に慎重意見が出てくるのは当然である。「祝日」を「休日」としか捉へぬ現在の風潮に対して、神社人は「祭日」「祝日」「休日」の別を再確認し、またなぜある特定の日がその祝日として選ばれたかをも吟味したうへで、日々の神明奉仕の中でこれを明らかにしていく必要があらう。

○

確かに現状では、祝日を単なる休日と考へ、その「日付けの持つ意味」を考へる人が少なくなってしまってゐる傾向がある。その端的な例として、七月二十日が「海の日」とされた時に、知人の子供が言った言葉がある。それは、「夏休みが一日増えた」といふ至極もっともな、子供なりに感じた言葉である。その子供の通ってゐる学校は、七月二十一日から八月末日までが夏休み期間であったが、「海の日」の施行にあたって結果的に夏休みが二十日からとなり、休みが一日増えたことになる。子供にとってうれしいことは良くわかる。

この子供は、「海の日」制定に関する意義を聞かされないままでも、「海の日」を七月二十日から他の日に変更しようといふ意見が出た時、きっと反対するだらう。それは「海の日」の意義とは別次元の「夏休みの日数が減る」といふことからの祝日移動反対意見である。

なぜ制定されたか、また、なぜその日付けが選ばれたか、との意味を理解せず、ただ漫然と休み、そして遊ぶために祝日移動に反対するのであれば、祝日の意義がなくなってしまふと思ふのは筆者だけであらうか。

○

「祝日」と「日付け」の問題で思ひ起こされるのは、戦後神社界が一丸となって取り組んできた「紀元節」復活の問題である。

祝日法が改正され「建国記念の日」が制定されたあと、日付けをいつに選ぶかとの問題が残った。紀元節復活を目指す側からは、当然「二月十一日」が主張された。これはもちろん戦前の紀元節の日付けであり、明治以来、この日を「神武天皇即位の日」「日本の建国の日」として祝ってきた。そこで「二月十一日」を「祝日・建国記念の日」に選ぶことは、紀元節を奉祝した精神を継承し、神武天皇からの万世一系の皇室を戴く国としての日本国の建国を祝ひ、国の弥栄を寿ぐこととなる。そのために、紀元節の日付けである「二月十一日」が主張された。

祝日の意義

一方で、例へば「新憲法施行の日」を建国記念の日とすべきだと主張した勢力は、その主張に「日本国の歴史が分断されたこと」を明らかにしようとの趣旨をこめた。すなはち、例へ反伝統勢力としても、日付けに精神を見出さうとしてゐたことは、その運動の中に読み取れた。

かやうに、日付けにこめられた精神そして意義は、その祝日の意味を全く変へる程重要である。

○

現在「国民の祝日に関する法律」には、十四の祝日が定めてあり、それぞれにその日を祝日とするための趣旨が付されてゐる。付された内容には、神社界の主張と相容れない部分もあり、また我々にとって不十分な点が多いことも否めない。だが、その内容を踏まへた上で、国民の祝日の改正に対処していくことが求められよう。内容を踏まへぬ論議は、子供達が「夏休みの日数が減る」との言葉で「海の日」の移動に反対するやうな、短絡的行動に結びつきかねない。

祝日の移動を意図してゐる団体には、旅行業界などが多く加盟してゐる。これらの主張には「ゆとりある生活スタイルの実現」「休暇の分散効果」「地域の活性化及び経済波及効果」「祝日の意義の浸透」との文言が並べられてゐる。それだけならば、由緒ある日付けを動かすことなく「休日」を増やすことで、十分対処できるはずだ。

祝日は、その日を祝日とするに至った意味に思ひをいたす日である。その上で、該当日が祭りを奉仕する「祭日」の意を含むのか、記念日として祝す「祝日」であるのか、また単なる「休日」なのか、神社人であるならば真摯に考へ、対処すべきであらう。

祝日の移動を反対する人々が、かうした態度をとらずに、ただ表面的もしくは自己の利益のみで軽々しく祝日移動反対運動などに終始すれば、「神社の増進」「経済問題」で祝日移動を意図し伝統的な精神そして権威を貶めようとする力に流されてしまふやうに感じられてならない。

（神社新報）

沖・中両宮 春季大祭斎行

＝大漁満足と海上安全を祈る＝

沖津宮・中津宮両宮の春季大祭が、旧暦の三月十五日にあたる四月十一日に氏子崇敬者二百余名参列のもと厳粛盛大に斎行された。

大祭前の九・十日の両日、大祭諸準備が沖・中両宮奉賛会、同敬神婦人部、又各区委員の御奉仕により行われた。

九日、生憎の霧雨の中、御嶽宮、中津宮遙拝所の清掃〆縄取り替え作業、又大祭用餅搗き、直会準備がすすめられた。十日は、前日の雨もあがり青空の広がる中、中津宮境内の〆縄取り替え、幟立て、奉納子供相撲土俵場の整備等の作業も順調にすすみ、午後二時すぎには大祭諸準備は全て終了した。

午後三時、中津宮本殿横にて、佐藤奉賛会長外役員が参列し地主祭を斎行して大祭の無事を祈願した。

又午後五時、中津宮春季大祭宵宮祭を升谷祢宜外二名の神職の奉仕にて斎行。同刻、中津宮春季大祭宵宮祭を太田宮司外二名の神職の奉仕にて斎行。明日の大祭が滞りなく無事盛大に斎行出来るよう祝詞が奏上された。

翌十一日の大祭当日、午前八時半より、島の宮崎地区に鎮座する中津宮境外末社厳島神社の春祭が、宮本昭則区長をはじめ氏子各位多数参列のもと斎行され、海上安全・大漁満足・家内安全が祈願された。

――◇――◇――

沖津宮大祭

遙拝所にて斎行

午前九時、沖津宮遙拝所に於て沖津宮春季大祭が斎行された。海上遙か四十八キロ先の沖ノ島へ神饌がお供えされ、つづいて太田宮司の祝詞奏上、巫女二名による浦安舞が奉納された。次に沖・中両宮奉賛会、宗像大社氏子会代表等が玉串を捧げて拝礼し、沖津宮春季大祭は滞りなく終了した。

午前九時半、大島村最高峰（二一七m）山頂に鎮座する中津宮境外摂社御嶽宮の春祭が農事関係者多数参列して盛大に斎行された。

午前十一時、中津宮春季大祭を斎行。この日は境内の桜も丁度満開となり、天候も青空の広がる爽やかな日和りとなった。定刻、太田宮司以下神職並巫女、氏子奉幣使外関係者一同本殿へ参進。一鼓、修祓、太田宮司祝詞奏上とつづき、氏子代表として田志正弘氏奉仕による氏子奉幣使の奉幣詞が奏上され、次に巫女二名による浦安舞が奉納された。玉串拝礼は、佐藤千里沖・中両宮奉賛会長、今里タケ子敬神婦人部長、丸井房芳翼賛会長をはじめ、杉田村長、遠藤議会代表、平田大島漁業協同組合長等が行った。

又この度、米子市から遙々と参列された蓮華会一行五十七名を代表して佐々木惠美子会長が玉串拝礼を行った。

祭典終了後、昨年中に沖・中両宮の御神前に度々献魚をされた方々に対して、太田宮司より感謝状と記念品が贈呈され、敬信の念に厚い感謝がしめされた。

つづいて直会の儀が行われた。今年は参列者多数の為、会場を当社照海殿と大島漁協一階を借り、二会場にて盛大に開催された。

また午後一時半には、奉納子供相撲が境内土俵場で満開の桜の下にて行われた。取り組みは大島小学校一年生から六年生までの男女五十余名で行われ、詰めかけた大勢の父兄等の応援のもと熱戦を繰り広げた。

この神賑行事も午後二時半に終了し、この春の沖・中両宮の春季大祭は好天にも恵まれ、氏子崇敬者多数の御参列を頂き滞りなく無事盛大に終了した。

平成九年沖津宮・中津宮両宮献魚者感謝状贈呈者名。

（順不同）

沖栄水産　代表沖西敏明殿
春日丸組　代表佐藤隆二殿
宮地丸組　代表豊福敏博殿
海宝丸　福崎　久幸　殿
春日丸　佐藤　精一　殿
沖一丸　佐藤　守　殿
友栄丸　沖西　敏明　殿
常吉丸　上野　智行　殿
坂嘉丸　古賀　理　殿
大栄丸　坂口嘉一郎　殿
田志　力男　殿
成幸丸　藤島登志男　殿
威徳丸　丸井　房芳　殿
宝栄丸　古賀　徹也　殿
英光丸　河辺　三男　殿
三祉丸　田志　正弘　殿
健幸丸　河辺　幹夫　殿
大国丸

以上

一誌一話 古代の海上航路(4)

樂岱　子

中央に神の島沖ノ島を抱き、古代から日本の玄関口の役目を果してきた玄界灘は、今も多くの船が往き来している。この海路は海北道と呼ばれ、朝鮮半島や中国大陸を結ぶ海のシルクロードであった。

この海上を昔はどの様な船が往来していたであろうか。

海北道の標式ともされた神祭の島沖ノ島で、八～十世紀にかけての祭場、露天祭祀（一号遺跡）から多量の滑石製の舟形が出土してきている。他にも形代として人形や馬形も奉献されているが、やはり海上通行の祭りの場だけあって、舟形がだんぜん多く供えられている。そのほとんどが滑石製品であるが、銅製の舟形も奉献されていた。

祭祀の時代から考えて、刳貫型の舟形ばかりではなく、構造船型と推定できる舟形も出土している。中には舳先の部分と艫の部分に、各々一本の沈線を掘り込み舟形としているのもあるが、若しかすると、「筏の雛形」の形代であったとも想定できる。

先年、長崎県壱岐の「原の辻遺跡」から大形の船着場の遺構を発見したと報道された。これは当時の交通機関の主力が船であったことの証明でもある。

宗像大社神宝館には「對州筏船」と名附けて、対馬で作られ、実際に使われていた筏を展示している。

この筏は杉の木の大木の心を用いた、長さ八・五m幅一・一mを計る大形の物で、一本が一五㎝もある五寸角の角材を使っている。舳先と艫の先端から約一mばかり内側に入った所に、長方形の穴を空けて厚手の平板を打ち込み、角材を継ぎ留めて七本組とした筏である。

筏の数も少なくなったが対馬では、材木筏船と呼ばれて、艫漕ぎの運搬船として今も利用されている。また日本各地でもまだ健在の所もあると言われる。

対馬と同形の筏が韓国の済州島でも使用されていた。

済州島の筏は、艫に囲をして棚を着けている。また現在は船外機も着けての操業である。多くは若布刈りや鮑・栄螺の海女漁の時に使用されるが、時には立て網漁の時にも使われると言われる。これ等は従来の筏よりも使用目的に応じて変形された筏である。

筏船での操業は、中国の南支の海岸や東南アジアの国々でも、今も多く使用されているらいしいが、特くにヴェトナム地方では木の角材をプラスチック製のパイプに変え、筏を組んでいると聞いた。

実際に現物を見たり、人づてに聞いたりしたことから類推してくると、初期の沖ノ島祭祀では筏形の帆船で島に渡っての祭りであったろうとも推定される。何故なら、丸太を刳り貫いて作った刳貫型の船から初まった船も、箱形になると水による転覆遭難も多く起ってくるが、筏の場合は水濡はあっても転覆することはまったく考えられないからである。

一号祭場に奉献されていた沈刻線のみの舟形は、この様に考えると、筏の雛形と推定しても強ち違がいではないと思う。

昭和天皇の御聖徳を追慕し
昭和祭斎行
＝併せて大社奨学金受給奉告祭＝

昭和六十四年一月七日、昭和天皇が崩御なされて早や十年の歳月が流れた。

昭和天皇は、明治三十四年、大正天皇の第一皇子としてご誕生になり、大正十年、数え年二十一歳にして摂政となられ、その五年後に第百二十四代の皇位につかれた。

爾来六十三年間、文字どおり激動波瀾の昭和の御代を、終始国民と苦楽をともになされた天皇であった。

第二次世界大戦直後のある日、天皇は御自ら連合軍総司令長官、マッカーサー元帥をご訪問され「一切の責任は私にある。自分の身は任せるから、国民の飢を救ってほしい」と申された天皇の、崇高なお言葉に元帥は大変驚き、その無私の心を知り「仁徳篤き英明な君主であられた」とマッカーサー回顧録の中に記している。

昭和天皇の御製

〝身はいかに
なるともいくさ
とどめけり
ただたふれゆく
民をおもひて〟

四月二十九日は昭和天皇御誕生日（天長節）である。

天皇は草木、魚介類にも深いご仁慈を寄せられる科学者でもあられた。

そのご業績を偲び、平成の世にこの日を〝みどりの日〟と呼び祝日に定められた。

当大社でも天皇のご偉業を寿ぎ〝昭和祭〟を斎行し、太田宮司が、昭和天皇の御聖徳を讃え、皇室の弥栄と国家国民の繁栄、安泰を祈る祝詞を奏上し、当大社巫女による浦安舞が舞われた。

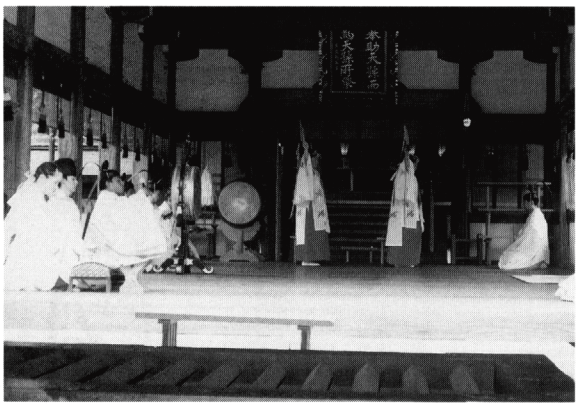
〝あめつちの
かみにぞいのる
あさなぎの
うみのごとくに
なみたたぬよを〟

昭和天皇の御製を、皇紀二千六百年奉祝の際、祭祀舞と制定されたのが浦安舞である。

併せて、当大社奨学金受給生奉告祭も行なわれた。

昭和三十四年に、今上陛下御成婚を記念して「宗像大社奨学金給付規程」が定められ、翌三十五年四月二十九日の天皇誕生日に第一回受給生奉告祭が斎行されてから、今年で第三十九期生を迎え今日までに延べ五七六名の受給生が誕生している。

御皇室の弥栄を祈り、歴代天皇の御偉業を寿ぎ万歳を祈念する心は、日本人の誇りであり、後世に受け継がなければならぬ日本国民の義務であろう。



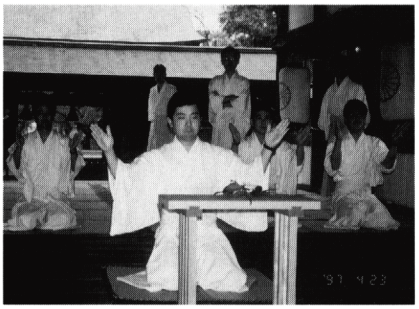
出光店主室
第五十六期生宗像研修
（感想文）

佐藤則行（一班）
（出光興産　兵庫製油所）

宗像様には初めて参りましたが、辺津宮の佇まいは想像以上に荘厳なものでした。一方、高宮での夜の鎮魂では、その簡素さの中で厳粛な心持ちを覚え、様々なことを自然に考えることができました。

太田宮司様のご講話では、宗像様の「国民の祖先」としてのあり方を教えて頂き、格式の高さを認識しました。弊社創業者の出光佐三店主の、宗像様に対する深い思いがよく分かりました。また升谷祢宜様のご講話では、宗像様と地元の方々との関わりの深さを知り、その温かさが印象に残りました。

神様にご奉仕する経験は初めてでしたが、当初は好奇心のみの単純な思いだけでした。しかしながら、時間が経つにつれて、神様と自分の先祖とが一体に感じられるようになり、祭式作法は「先祖を敬う礼儀として大切なこと」と思いを改めました。お忙しい中、私達のためにお時間を割いて頂き、貴重な体験を与えて下さった宗像大社の皆様に、心から感謝しております。

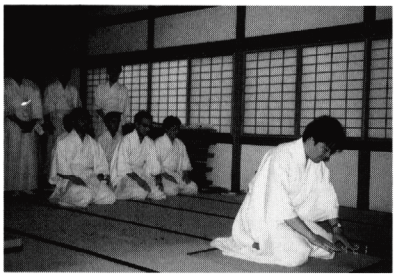


織戸　敬（二班）
（出光興産　研究開発部）

恐らくは一生に一度の経験であったと思います。毎朝の日供祭と夜の鎮魂では、慣れない正座の苦痛もさることながら、神様に近づくという忘れ得ぬ経験をさせて頂きました。

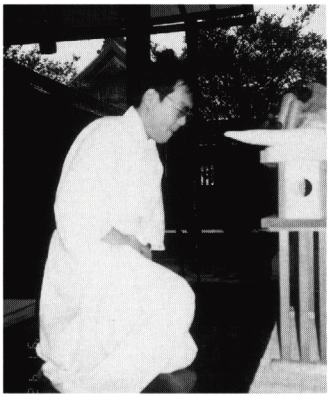
太田宮司様には神道の歴史や宗像様の社格、名称の由来を教えて頂き、御社の元官幣大社としての堂々たる風格を、改めて感じることができました。中津宮参拝では、長い石段や奥ゆかしいお社に、子供の頃に遊んだ神社を思い出し、心の故郷の様に思えました。

沖ノ島は訪問できませんでしたが、升谷祢宜様にお話しして頂いた「おいわず様」のお話等から古来の生活感が偲ばれて、宗像の姫神様を身近に感じることができました。



相田真男（三班）
（出光石油化学　千葉工場）

高宮での鎮魂では、神経が研ぎ澄まされ、木の葉の落ちる音、虫の声、動物の走る音に囲まれた中で、人間とは何と小さな存在なのかを、そして自然との一体感を感じました。太古の時代からの、今までは、神社には初詣や交通安全など、お願いごとをしに行くものと決めつけておりましたが、これからは神道や日本の歴史を意識しながらお参りできると思います。太田宮司様はじめお世話になりました神職の皆様、地元の皆様に心よりお礼申し上げます。



日本人の自然崇拝の心を教えて頂いた様に思います。

太田宮司様、升谷祢宜様にご講話を賜り、宗像様の有り難さを実感でき、創業者出光佐三が何故その復興に力を注いできたのかが分かりました。同時に、文明が発達し、神様や自然への有り難さが失われつつある今日だからこそ、みあれ祭り等の伝統は、是非ともそのままの形で遺して欲しいと思いました。

私は現在、石油化学製品の製造部門におりますが、今般、宗像様でご教示頂いた自然と人間とのあり方を忘れずに、自然に還ることのできない化学製品の回収、リサイクルについて、真剣に取り組みたいと思います。

吉田淳一（四班）
（出光興産　総合計画部）

宗像様での研修では、高宮での鎮魂が特に印象に残っております。古代さながらの庭上座礼での祭祀の中に、太古の時代から日本で伝承されてきた神道なるものを実感できました。

しかしながら、それ以上心に残っているのは、宗像大社様の、そして地元の皆様の「まごころ」です。太田宮司様、升谷祢宜様には、貴重なお時間を割いてご講話して頂き、神道とは何か、神道の中での宗像様の位置付け、そして宗像様と地元の方々との結び付きを知ることができました。日本人として大切なことを教えて頂いたように思います。また、日々私達の面倒を見て下さった神職の皆様、美味しい食事を作って下さった皆様、中津宮参拝の際にお世話して下さった大島の皆様など、多くの方々の「まごころ」に支えられた研修であったと思います。本当に有り難うございました。

皆様の「まごころ」に対する感謝の思いを忘れることなく、仕事を通じて、日本人のあり方の伝承に取り組んでまいる所存です。

新たなる使命感を与えて下さった太田宮司様はじめ宗像大社の皆様に、重ねてお礼申し上げます。

社務日誌抄

四月一日（水）
春季大祭斉行
（午前十一時）
太田宮司以下全員奉仕
氏子奉幣使奉仕
宗像市井上清氏
主基地方風俗舞奉仕
保存会会員七名
浦安舞奉仕
田島区中学生四名
祭典参列者
宮地嶽神社
宮司二宮久暢氏
鎮国寺住職
立部祐道氏
祖霊社
宮司越智珍友氏
東郷神社
宮司内田久美氏
宗像大社責任役員
占部真太郎氏
衆議院議員
渡辺具能氏
宗像郡町村議長会
会長伊藤秀夫氏
外約二五〇名参列。
参拝、出光石油化学㈱
福岡支店長船谷伸正氏

四月二日（木）
春季大祭第二日祭斉行
（午前十一時）
太田宮司以下神職八名
奉仕
祭典参列者
宗像大社氏子会
会長出光太蔵氏
宗像大社責任役員
的場重郎氏
沖・中両宮奉賛会
会長佐藤千里氏
宗像大社海洋神事奉賛
会々長矢野虎太氏
神社庁宗像支部
神社総代長沖宗利氏
外約一〇〇名参列
宗像護国神社春祭斉行
太田宮司以下三名奉仕
宗像市遺族会連合会
会長出光太蔵氏他
各連合会会長参列

四月三日（月）
参拝、第七管区海上保安
部本部長久保田勝氏福
岡海上保安部坂本部長
他三名

四月十五日（水）
月次祭斉行（午前十一時）

四月十九日（日）
会合、宗像大社菊花会理
事会午前十時より開催

四月十三日（月）
篤信者約二〇〇名。

四月十四日（金）
祭典、研修生終了奉告
祭日供祭併せ斎行

四月二十九日（水）
昭和祭並第四十九回植
樹奉告祭斉行
奨学金受給生奉告祭

平成十年度献上若布採
取者表彰
永島昭弘氏他十一名

四月四日（土）
神賑行事、奉納吟詠大会
清明殿にて開催
参拝還暦祈願　花田武
治氏他十六名
未申会、吉武邦彦氏他
三十名（四十四賀）

四月七日（火）
春の交通キャンペーン
宗像警察署と合同で、
宗像市三郎丸にて行う

四月九日
福岡県神道青年会第一
部会役員会午後六時。

四月十一日（土）
沖・中両宮春季大祭斉行
太田宮司以下神職四名
巫女二名奉仕
参列、海洋神事奉賛会
役員地元崇敬者一同、

宗像大社歌会 俳句作品集（四二〇）

福間　森　清

畑仕事大の手伝ふ霞む岡

自由ヶ丘　細川　絅子

春寒し床にかけたる磐石面

日の里　花田いつ枝

戦碑より高きものなし春霞

小　笹　山下しづえ

春四月老稚園にも花の宴

福間　二宮　末子

赤赤と灰火もへてる旅の宿

藤　沢　井上　玄洋

踏み迷う程に積もり落花かな

東　郷　吉武　湧泉

蕗の薹余生を托す子のありて

東　郷　中野　きみ

落ち椿のせて鎮まる石祠

東　郷　吉田　杓子

花明りかすかに秘仏立ち給ふ

東　郷　吉田　杏子

四つ塚も深き眠りや粉雪舞ふ

東　郷　三浦美千代

鳥帰る吾が帰る日は何時何処に

東　郷　有吉亜紀子

命日を偲びておりぬ鳥帰る

東　郷　田中　雨葉

鉄骨を日々組む空や鳥帰る

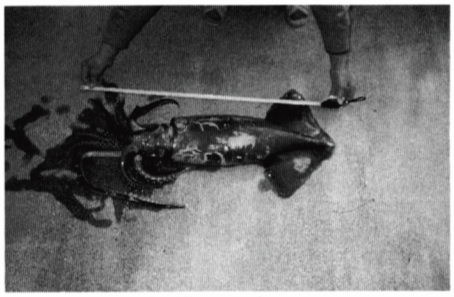
東　郷　木原　房子

山寺へ道幾曲り辛夷咲く

（続）浜の寄物 126

いしいただし

三月十九日午後から台風なみの大荒れの天気で、春疾風、春の風だった。筑肥線・福岡市今宿では電車が浮きあがって脱線するほどの風だった。海の大荒れだったが、その二日後の二二日、今迄見たこともないイカが漂着した。その日も福間浜の漁師小屋撤去後の放置された石錘（石製おもり）を回収した帰りだった。花見浜の波消ブロックの間に赤ぼい大きなイカが漂着していた。てっきりソデイカと思っていたら、スルメイカのようにヒレが後方についている。それにしても大きいし、はじめて見るイカである。自転車につんで家まで運んだ。



福間花見浜のバカイカ

北隆館の「新日本動物図鑑」で調べてみたら、正式学名はバカイカという。このイカは背套長四〇〇ミリ（四十センチ）くらい。外套は亜紡錘形で、中央部がもっとも幅広く、皮膚は滑らかで肉質は硬い。鰭は左右に拡げると菱形で幅は套長の約四分の一である。全体暗褐色でアカイカの名があり、またメダマともいう。スルメイカに混じて採捕され、食用になるが採れる量は少なく、水産物として、重要な位置を占めるということはない。分布は広く世界的とある。

大量に採れないので、私達には今まで目に触れることはなかったのであろう。測ってみたら背套長四九センチ、幅一六センチ、触腕一番長いので六一センチあった。重さ五キロ。ソデイカのような鮮やかな赤色ではなく、赤紫色で、図鑑では、学名をバカイカといい、アカイカとも呼ばれていることも知った。実は冬に漂着するソデイカはアカイカとかベニイカ、ヒイカとも呼ばれているのは、体長が赤いからである。またバカイカとも呼ばれているが、どうも名称ではソデイカと混同されているふしがある。

今年一月に岡垣浜で添田征止氏が漂着しているのを確認している。まだ腐敗していなかったので、背とう部は解体し食べてみた。テンプラと焼いてみたが、焼いたら硬いが味はなかなかいける。鰭と足の部分はそのまま残してフォルマリに漬けて保存した。

さて四月二四・五日添田征止氏と島原半島巡りを思いたった。目的地は長崎県南高来郡有明町から口之津までである。福岡を朝七時に出発、諫早を経由して島原半島へ、島原鉄道と並行する国道二五一号線を走り、十時前に有明町へ着いた。有明町の有明海側は漁業がさかんである。ここはテングニシやアカニシの巻貝と二枚貝のオオサルボウの殻を使った貝製イイダコ漁がさかんである。旅の目的はその貝製イイダコの一部が捨てられているので、それを拾うことであった。漁村の周辺の空地や家の周囲には陶製のマダコ用タコ壺と、貝製イイダコが山積みされている。二枚貝のクマサルボウをよく見るとそっくりに作られたプラスチック製のイイダコもたくさんある。従来この二枚貝や巻貝は対岸の熊本県側の海底で採取された死殻を使っていたが、それが減少したためプラスチックでが造られることになったという。貝殻を使うのは、他の貝の付着がないし、イイダコが貝殻を好むという。

刀禰勇太郎の「蛸」（法政大学出版）ではこのような貝製イイダコ漁は東北から九州まで各地で行われている。また利用される貝の種類は二枚貝ではウバガイ、アワビ、ハマグリ、クマサルボウ（モガイ）類で巻貝ではアカニシ、テングニシ等である。

海岸の方を歩いてみたら二枚貝、巻貝の貝製イイダコがたくさん捨てられていたので二千個ばかり拾ってきた。巻貝のアカニシで、一〇センチから一五センチほどあり、殻もぶ厚く重い。テングニシは大きなもので二〇センチから三三センチあった。共に螺塔と殻口のところに一孔を穿っている。二枚貝は殻長のところに一孔を穿って二枚をビニールひもで結ばれている。貝の表面には所有を示すカナやマークのシルシがペンチでつけられていた。

石錘と共に古代から時代がとまり同じものが今日まで続いているのが興味深い。海岸を歩いていたら腐敗臭が風にのってくる。一五〇〇センチほどのゴンドウイルカの死骸だった。他に添田氏は海亀の甲羅片も採集された。口之津の海ではイルカウオッチングも行われている。有明海はイルカも多い。

青柳種信著 平野国臣写 瀛津島防人日記（上巻ノ十）

反歌

時じくのかぐ（香）の
この実をまつり置て
我もあえ（肖）てん
そのとこ（恒常）しき
に

十九日（四月）。小屋嶋にあさる。此しまは、沖つしまの東南廿丁ばかりに在。高さ七丈ばかり。なべて巌のみにして土なし。木もなく山の上に草少し生たり。

岸にいがひ・ささえ・螺石花多し。深き岩の谷に、浪の打入音、雷のごとし。あら・すすきなど釣んとて、岸に臨みて釣垂れしに、大魚のうな（海底）そこより遊出て、鰭をたてて浮沈む。その大きさ乗てこし舟ひとし。人々恐ちて、岩の陰にかきつきふるひをり。

あま（漁師）どもは、かれとりてん、などのののしりあひ、鋒取のべ、岩の上に立わたる。魚は青海をとよもし、沖のかたに出ぬ。よくよくみれば、鮫魚にざりける。

おきつしまを見さけて、

"ここしかも岩の神さび
福草のみかみの嶽に
雲ゐたなびく"

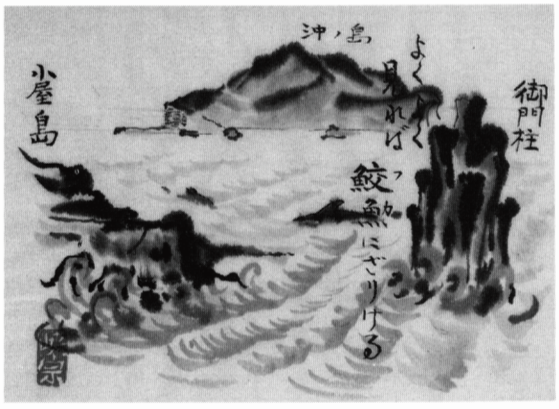
此嶋の東南の方、海中に、御門柱と、高さ七丈ばかりの岩、柱の如立のぼりて、二ツならび立チて、沖つしまに向ひたり。

其かたち怪也。両岩のあひだ、七間ばかりもやあらん。其間、海甚ふかし。

"ふたならび
大海原に立ならぶ
御門の岩見るが
たふとさ"

或日、御社にまゐりて、

"天地の始の時に天照す
日女尊　味凝の
あやにかしこき神語に
のらし給はく　三柱の
姫大神は　わたの北の
道のみなかにしづまりて
御孫命の　櫻木の　弥つ
ぎつぎに　知食　天津日
嗣を　守給ひ　誓ひ給へ
と　言依し　よさし玉へ
りそこ故に　御ことのま
にま　あま雲の　やへ掻
わけて　筑紫なる　崎門
の山に　あまくだり
いまして玉ひて　水江の
青蛙美玉を　沖つしま
此大宮のみしるしと　い
はひまつらし　八坂瓊の
紫の玉は　中津宮の
しるしにおかし　八咫鏡
とらし玉ひて　辺津宮の
神の御象とのり玉ひ
おかし玉へり」しかれこ
そ　いまめをつつに
福草の　みつのみたから
を



故郷の神宝 (39)

〈奈良三彩小壺〉

古代の明器奈良三彩小壺が、何時何処で何の様にして作られていたか、製作地の窯跡は未だ不明である。また用途についても同様であり、何時何処で何の為に何の様に使われていたかも、まるで不明である。

前号でも述べたように、彩釉陶器はそのほとんどが祭儀用品として使われていたようであるが、ここで一つの使用方法を考がえてみよう。

その方法の一つとして、奈良三彩小壺は粉薬を収納しておく薬壺ではなかったかと考えられる。薬師如来の左手には、そっと置かれたような格好をして、薬器がある。この器の形状などに奈良三彩小壺との類似点が多くみられる。仏の像形からして小壺の利用法の一端を窺い見るようであり、また使用法の解明にも役立つであろう。

古代社会では、誰もが手にすることの出来ない、一番大事な宝物の一つに上げられるのは、やはり薬である。当時としても、薬草となる草々を煎じ薬や貼り薬として使うことは、別にたいしたことではなかったであろう。しかし、動植物や鉱物を粉末にした粉薬は、手に入れることは無理であった。この量産できない高価な粉薬の保存庫が、奈良三彩小壺であったろう。いかに少量といえども、一般には絶対にと言っていい程、手に入れることが難かしく、その為に薬は、誰も持つことが出来ない容器、奈良三彩小壺の中に仕舞、宝物として明器と一緒に収納していたと考えられる。

薬師如来は現世の全ての病からのがれようとする人々の願いを、諸薬によって適える尊い仏として敬われている。その形像は一般的には、左手の掌の上に薬器（薬壺）を持つ像が多く、よく知られている。この薬器は底は定かではないが、奈良三彩小壺と同様に小形の球状をした壺には、宝珠形の撮みを着けた蓋が附いている。

薬師に対する信仰思想が仏教の初期からすでにあったと言われているが、ここには薬師如来の導びきにより、この世も来世も極楽浄土を迎えることが出来ると云う。法隆寺金堂や法輪寺の薬師如来像からして、薬師信仰は日本では七世紀中葉頃には、すでに初められたと云われている。

この仏教の初期からあった思想と、手に入らない高価な物をより大事に扱うことが一致して、薬師如来が持つ薬壺と同類として小壺が作られたと推察される。

奈良三彩小壺の出土状況（沖ノ島1号祭祀遺跡）

薬壺を持つ阿弥陀如来像

沖ノ島祭祀遺跡での奈良三彩小壺の出土状況をみると、蓋を被せた小壺を須恵器の壺の中に入れたり、碗や皿の上に置いたりした状態である。これは祭りに際して、当時としては非常に数少ない一番豪華な明器を神への供え物として、容器に入れた特別扱いの捧げ物としている。二重にされたより高価な物の供えは、やはり荒海を渡る遠い国への旅立ちの安全航海を願い、絶対神へと頼み込む、より強い祈りである。

〈松〉